

受験時点と在学中の5教科成績プロフィールの特徴 ——ある高等学校についての事例分析——

池田 輝政*

山村 滋*

岩田 弘三**

要約

本研究では、文系と理系という類型別編成を採るある高校の事例に基づき、受験時点の5教科(国語・数学・外国語・理科・社会)成績プロフィールが高校在学中の試験成績の5教科プロフィールとどのように関係し、彼らの進路選択の現実とどのように係わっているかを調べた。

事例校の受験時の5教科プロフィールの特徴は、全国的にも高い比率となる理数、国社、国外の型に加えて、国理や国数の型も同じく高い比率となった。この高校の受験時の特徴を在学時の試験成績プロフィールと対応させた結果、国社や理数や国理は在学時でも安定して高い比率を示した。また受験時点で高い比率を示した国外や国数の型は在学中には一貫して高くはないが、受験時に近づくとき次第に高くなる傾向がある。

また成績プロフィールの集団差について、学習内容の差異を意味する類型差をみてみた。その結果、受験時点でも在学中でも一貫した特徴として、国社、国理、社理の型は文系集団に偏り、理数と国数の型が理系集団に偏る。

受験時点と在学中の成績プロフィールの等質性を仮定して、以上のような集団の特徴を抽出してきたが、さらに個人レベルの成績プロフィールの推移状況についても分析を行った。その結果、10タイプのプロフィールのなかで国社、国外、国理、理数の4つの型が同じ型に留まる傾向性の強い型であった。また、とくに3年10月と受験時のプロフィールの推移において、生徒個人の5教科の成績プロフィールが安定する可能性を示唆した。

以上のような5教科プロフィールの分析を踏まえて、事例校の文理の志望変更者等について成績プロフィールの特徴を調べてみた。とくに理系集団については、いわゆる「隠れ文系」なる現象が指摘されてきているのと符号すると思われるが、国社あるいは国外や社外に変更者・変動者がやすい。

* 大学入試センター研究開発部 試験制度研究部門

** 大学入試センター研究開発部 評価・追跡研究部門

大学入試センター研究紀要 No. 21, 1992, p. 59~79 (平成3年12月27日受付)

© 1992 THE NATIONAL CENTER FOR UNIVERSITY ENTRANCE EXAMINATION

目 次

はじめに	3節 志望変更者等の5教科プロフィール
5教科プロフィールと「学力型」について	まとめと考察
受験時および在学中の成績プロフィールについて	補遺 .10タイプの「学力型」の統計的特徴について
1節 5教科プロフィールの変化とその特徴	
2節 文・理志望の変化とその特徴	

はじめに

本研究では、受験時点の5教科（国語・数学・外国語・理科・社会）成績プロフィールが高校在学中の試験成績の5教科プロフィールとどのように関係し、彼らの進路選択の現実とどのように関わっているかを調べる。

このために以下では、文系と理系という類型（コース）別編成を採るある高校の事例に基づき、まず第1節では、2年次の類型選択（コース振り分け）後から共通1次受験時にいたるまで、生徒の成績プロフィールを集団単位で経時的に比較したり、さらには個人単位でその推移を追跡して変動の実際と特徴を調べる。第2節では、成績プロフィールの分析とは別に、高等学校の進学指導の実際や問題点を把握するために、生徒の進路選択の揺れ動きについて調べる。第3節では、とくに志望が揺れ動いた集団に焦点を当て、彼らの成績プロフィールに何らかの特徴がみられるかを探ってみる。

5教科プロフィールと「学力型」について

すでに岩坪・池田・岩田⁽¹⁾は、各大学が決めた入試科目の方針が志願者や合格者の試験成績においてどの程度反映されているかを評価するために、共通1次試験成績を利用して個人における5教科成績の相互比較を表すプロフィールを作成し、分析を進めてきた。5教科の成績プロフィールは各教科毎に求めた成績順位（具体的には教科毎の標準得点）の上

下関係で表すことにしたので、組み合わせのパターンにそって120通り（5の階乗）の多様なプロフィールとなった。これをさらに類似のパターンに要約するために、順位の高い上位2教科に着目し、10タイプ（国社型、国外型、国理型、国数型、社外型、社理型、社数型、外理型、外数型、理数型）のプロフィールにまで縮退させた。そして、この分類結果を10タイプの「学力型」と呼んだ。

成績プロフィールの定量化に伴う問題点として、①各教科間の成績順位を計算の便宜からパーセントイル順位ではなく標準得点を使ったこと、②教科単位でプロフィールを描いたので社会科や理科の科目の違いを識別しなかったこと、③10タイプの「学力型」に縮退したので5教科プロフィールの情報量をかなり損失したこと、④縮退に際して上位2教科目と3教科目にわずかでも成績順位がつけば該当するケースはすべて分類したので、各教科成績の素得点の変動性を抱え込むことになったこと、を挙げることができる。

この後、共通1次の得点に基づく5教科の学力についての研究が、「学力型」という共通の概念のもとに推進され、先に示した10タイプの「学力型」に加えて山田⁽²⁾および鈴木⁽³⁾によって開発された「学力型」概念が鼎立することとなった。

山田の研究は、合計点や平均点によって表される5教科の総合的学力ではなくて、合計点（平均点）の周りに散らばる各教科の学力差を「学力型」として分類する点で、岩坪・池田・岩田の「学力型」と同じ方向にある。ま

たその分類が、受験生の本来もっている「学力型」とは一致するものではなく、あくまで「結果としての学力型」指標⁽⁴⁾にすぎない点を認識する点でも同じである。この意味では「学力型」指標の方法的な精練を目指すものであったし、確かに5教科プロフィールの情報量の保持と得点データの安定性を加味した指標を作成した。しかし30パターンもの多様な「学力型」指標に留まり、小規模集団に対して使える程度の縮退を実現できなかった。

これに対して鈴木の研究は、まずテスト理論の方法に基づいて個々の受験生の5教科の学力を推定し、そこから受験生集団のなかで比較的相関の高い教科のグループを因子として抽出した。抽出した国語・社会・英語の因子と数学・理科の因子を組み合わせ「総合強」、「理系強」、「文系強」、「総合中」、「総合弱」という5つのタイプを「学力型」と呼んだ。この意味では先の二つの「学力型」と異質であり、各タイプは5教科全体の平均値(合計点)の水準を含むものとなっている。したがって、得点データの変動性をコントロールして5パターンにまで縮退させた点で評価できるが、「総合」、「文系」、「理系」という概念の「学力型」であるために、5教科プロフィールを表現する「学力型」とは定義上区別して使う必要がある。

本研究では5教科の成績プロフィールを簡便に要約する指標として、10タイプの「学力型」指標を使用していく。その理由は以下のとおりである。

まず第一に、昭和54年度から61年度までの8年度について年度間変動をみた結果⁽⁵⁾、10タイプの型の構成比は比較的安定していた。上位2教科に限定した粗い指標ではあるが、集団単位の相対的な変動をみる限りはある程度信頼して使うことができると考える。

第二に、昭和62年度について志望先の学部

系統と10タイプの型との対応関係を調べてみた結果、法学系・人文社会系・経済系などの文科系学部系統に多く集まる型と工学系・理学系などの理科系学部系統に集まりやすい型があることが分かった⁽⁶⁾。文科系や理科系の学部系統に10タイプの型が一様に分布しないという特徴は、学部系統が有する何らかの差異をこの指標がある程度拾っていると考ええる。

第三には、国立の108の学部について昭和61年度の入試科目の方針と志願者および合格者集団の「学力型」を個別に比較した結果、入試科目の方針を明確にすればそれに対応して志願者や合格者の「学力型」にも変化が現れやすいことを示唆した⁽⁷⁾。受験生が各大学の入試科目の方針に反応して行動している現実をよく知られているが、10タイプの「学力型」指標によってこうした現実をある程度すくいとることが可能である。

第四に、10タイプの「学力型」指標をいくつかの入学者選抜の場面で実験的に使ってきたが、ある程度は役に立つという実感も得てきている⁽⁸⁾。つまり、この指標は先にも指摘したように限界をもっているが、①受験生の現実の行動のある側面を映しとるものとして(たとえば、志願者集団の間の構成比をみて入試科目の条件の影響を推測してみる)、②各大学の入試科目の選抜効果を表すものとして(たとえば、志願者集団と合格者集団の比率の差をみて入試科目の効果を推測してみる)、という面に有用性がありそうである。

したがって、以下ではこの10タイプの「学力型」指標を利用して、高校生の在学時点および共通1次受験時点の成績プロフィールを要約してみることにする。

受験時および在学中の成績プロフィールについて

ところで、公立高等学校の教育課程に関する調査結果⁽⁹⁾によると、類型を設ける学校は昭和63年度で8割近くある。定義によると、類型とは教科・科目の系統的かつ組織的な学習計画を支えるために設けられるものであり、どの類型を選択させるかは生徒の能力、適性、進路、興味・関心などに応じて行われるものとされる。

生徒の多様な側面を配慮するという制度の趣旨は理解できるとして、学校経営の現実や大学進学競争という条件のなかでそうした多様な基準を適切に扱うことは、指導する高等学校にとっても選択する生徒にとっても非常に難しい作業である。

われわれが受験時点のみならず高校在学時点でまでさかのぼって5教科プロフィールを問題にする場合、こうした類型制の普及状況や現実の条件、そしてそこに生起するいろいろな問題点を視野に収めることになる。そのためには、高校の進路指導の場面にまで踏み込んで5教科プロフィールを問うことがどのような現実を拾うことになるのか、事例校の文脈に即してある程度見通しをつけておく必要がある。

高校生が類型選択をするときには、生徒の意識や学力そして保護者の意識などさまざまな要因が関連する。この高校の場合には、第2学年から文系と理系のコース分けを行い卒業まで固定する態勢をとっている。コース分けについては生徒と保護者の理解を得るためには6,7月頃から希望を聴き始め、11月の1次希望調査そして1月の最終希望調査という段階を経て決定される。コース分けに関する問題点としては、生徒の進路意識や進路計画の成熟度からみて3年次からのコース分けが

適切であるが、入試を考えて効果的な学習指導をするには早くからコース分けしたほうがよい、という関係者の指摘が印象に残った。

こうした態勢からみてある意味では自然な事態と受けとめるが、2年次以降の進路指導上の問題点として進路変更者の問題が生じる。また、進路保障という考え方を重視すると、生徒や保護者の希望に加えて生徒個人の学力の把握とその観点からの助言に迫られる。生徒個人の学力を把握するとは、校外集団と比較してその生徒の水準を問題にすること以外に、学習指導に携わる教師が校内テストや日常の成績評価に基づいて生徒の学力の強みや弱みを知ることが意味する。本事例校では、校外模擬試験や全国偏差値によって生徒個人の相対的位置を知り、校内テストや素点から生徒個人々の学力の強みや弱みをつかむ、という使い分けが指摘されている⁽¹⁰⁾。

以上のような事例校の資料や知見を吟味してみると、5教科の成績プロフィールを問う意味についての示唆を得ることができた。それは5教科プロフィールがもつ二つの意味である。一つは、受験時点の成績プロフィールを問う意味であり、もう一つは、高校在学中(あるいは浪人であれば予備校在学中)の成績プロフィールを問う意味である。

受験時点の成績プロフィールは選抜のために使われる得点から取り出したものである。この場合のプロフィールは、その時点の5教科の実力を表したプロフィールと関連はあると思われるが、厳密にはあくまで測定結果として表れたプロフィールである。1回の測定という制約はあるが選抜情報として特別の価値をもつので、これはたとえば各大学が5教科を課した結果と対応させ、プロフィールの類似した集団がどの程度志願し合格したかを現実の効果として評価するためのデータとなる。

一方、高校在学中の成績プロフィールは、平素の授業成績、校内や校外のテスト成績から描かれるプロフィールである。平素の授業成績やテスト成績などを総合判定すれば、個人の実力を反映したプロフィールを描くことが可能であるように思われる。うまくプロフィールが同定できれば、類型選択や進路指導のみならず選抜にも信頼できる資料となりえる。しかしよく考えてみると、個々の成績は教師・指導内容・試験内容などで変動しやすいし、5教科の実力は教育・学習によって変容するのでそれをどの時点で判定するかが問題である。

さらに複雑な問題として成績プロフィールとは別に、個人の5教科への興味・関心などを表す自己プロフィールがある。5教科に対する自己プロフィールとは、それまでに形成されてきた意識である。これは個人に内在する教科への志向性の表れである。その意味では成績プロフィールより安定した性質と考えられるし、この情報も類型選択や進路選択のみならず、進学後の学習行動をみるのに必要となろう。

本研究においては、受験時点で獲得した5教科の成績プロフィールと、在学中における類似の校外模擬試験の成績プロフィールとを調べることとする。在学中のデータは校外模擬試験だけであり、その意味では個人の実力を表したものでなく、あくまで結果としてのプロフィールである。この点に留意しながら、受験時の成績プロフィールが在学中の成績プロフィールとどう関係するのかを調べてみよう。

受験時の成績プロフィールは、これまで①志願者の自己選抜結果や合格者の選抜結果の情報をみるために利用してきたが、今後は②入学後の追跡研究のための情報として、さらには本研究で目指すような③高校での進学

指導や学習指導のための情報として、何らかの有用性を見いだすことが必要と考える。これら3つの場面において情報の有用性を明らかにすることが、受験時点での成績プロフィールが高校と大学の教育的関連を考える意味ある情報になると考える。

このような展望に立って、数年来、本研究を進めてきた。この間、分析対象として適切な高校を数校選んで協力を打診してきたが、個人を分析単位としたプライバシーに係わる微妙な調査であるため簡単に協力が得られなかった。しかし幸いにもこの事例校責任者の理解を得て、分析を行うのに適切な規模の貴重なデータを入手でき、本研究を報告できることとなった⁽¹⁾。

調査方法

(1) 対象

平成元(1989)年12月に、A県のある公立高等学校を訪問し必要なデータの提供について調査協力を依頼した。分析対象としたのは、昭和62年度(昭和63年3月)卒業生466名である。

(2) 内容

① 5教科の成績プロフィールについて共通1次試験時までの経時的な変動を調べるために、在学中の試験成績を提供してもらった。具体的には、国語・社会・数学・理科・外国語の5教科に関する成績について資料の種類と適切な観測時点を高校責任者と相談した結果、2年次7月と1月、3年次6月と10月の校外模擬試験成績を使うこととした。ただし、2年次7月は国語・外国語・数学の3教科の試験であった。

成績プロフィールの基礎データは、在学中の場合は全国偏差値を利用した。受験時1月の場合は成績順位としてより適切と考えて、昭和63(1988)年度共通1次5教科受験者全

員に基づくパーセンタイル順位を利用した。

また5教科のうち社会科と理科に関しては、2科目の成績が利用できる場合にはいずれか順位の高いほうで代表させた。さらに共通1次の場合には科目間の得点調整を施したパーセンタイル順位を使った⁽¹²⁾。

以上、調査のデザインの段階で、校外模擬試験の場合はいずれも大規模な基準集団が得られる時期を選び、かつそれらをすべてマークシート方式の試験に揃え、できるだけ共通1次の成績プロフィールに近づけるよう比較の条件をコントロールした。しかしながら、厳密には各試験時点での基準集団は異なるであろうし、さらには受験時点はパーセンタイル順位そして在学中は偏差値というようにプロフィールの基礎データに違いが生じた。したがって、比較の際にはこうした制約に留意する必要がある。

② 成績情報に加えて、志望の揺れや変更といった進路変更の実態を知るために、各試験時点で自己申告した志望校、さらに卒業時点での受験校・合格校、卒業後の進学先の情報を提供してもらった。

すでに述べたように、この高校は2年次から文系と理系の類型(コース)に分けている。文系と理系ではカリキュラムが異なり、文系は社会2科目理科1科目、理系は社会1科目理科2科目の選択になる。また、文系は現代文4単位、古典3単位、確率・統計3単位、世界史7単位が指定され、理系の場合は現代文3単位、古典2単位、微分・積分3単位、確率・統計2単位、化学7単位が指定されている。

(3) 男女別の類型選択の実態

以下の分析に入るまえに、対象とした466名について男女別の類型選択の実態を押さえておく。以下の表に示すように、文系履修者は全体の56.9%を占め、理系履修者より多くなっている。その差64名だから、1学級(40

男女別と類型選択

(上段:人数,下段:比率)

	文系履修者	理系履修者	計
男子	85 (34.1)	164 (65.9)	249 (100.0)
女子	180 (83.0)	37 (17.1)	217 (100.0)
計	265 (56.9)	201 (43.1)	466 (100.0)

~50名)分より多い。

男女差は学年全体としては男子が約30名ほど多く1学級分までの差はない。しかし類型選択の結果、男子は6割以上が理系、女子は8割以上が文系となり、類型選択が性別によってかなり偏りがあることが明らかである。

分析結果

1 5教科プロフィールの変化とその特徴

1.1 事例校生徒の成績プロフィールの特徴

1.1.1 受験時の特徴——全国の現役受験生との比較

表1.1は事例校の成績プロフィールについて、10タイプの「学力型」を使って要約したものである。2年次の1月、3年次の6月と10月、そして共通1次受験時1月と経時的に並べてある。まず最初に受験時点の特徴をみるために、共通1次の全国現役受験生と比較してみよう。全国現役生の5教科プロフィールの要約は参考資料に示している。

全国現役生は、理数(14.5%)、国社(14.5%)の型がほぼ同じ比率で並び、つぎに少し低くなって国外(11.4%)、社外(10.5%)、社理(9.1%)の型がくる。一方、低いほうからみると外理(6.6%)、社数(7.9%)、国数(7.9%)、国理(8.7%)の型となる。

5教科の間の相関としては国語・社会・外国語というグループと数学・理科というグループに分かれることが指摘されている⁽¹³⁾。この知見からみても上位2教科に着目した場合、理科と数学、国語と社会、国語と外国語、社会と外国語の教科の組み合わせの比率が、他の教科の組み合わせより高い比率で出現することは合理的な結果である。

事例校の受験時の特徴はこの全国の特徴とはやや違う面が表れる。高い比率は理数(15.0%)、国理(14.8%)、国社(14.1%)、国数(13.6%)、国外(11.2%)の型となり、国理や国数の型が上位にくる点に特色がある。

この結果が事例校の教科指導の強みや生徒の受験学習の重点とどの程度符合しているのか、これだけでは何とも判断できない。しか

し、国語に対しては教科指導でもある程度成功しているが、外国語についてはどちらかと言えば弱い旨のコメントが学校関係者からあったことを指摘しておきたい。

1.1.2 在学中の成績プロフィールとの関係

先に示した受験時点の特徴と在学中の試験成績に基づく5教科プロフィールの特徴とを、表1.1にそって比較してみよう。

国社、国理、理数の型は在学中のどの試験時点でもだいたいにおいて高い。変動はある程度みられるもののほぼ1割から1割5分の範囲内にある。なお、国理の型の理科の科目を調べてみると、生物(2年1月は71%、3年6月は84%、3年10月は77%)がかなり多い。社理の型は2年次に最も多くて2割を占め

表1.1 各試験時点での5教科プロフィール(上段:人数,下段:比率)

	2年次	3年次	3年次	受験時	○参考資料 〔昭和63年1月現役受験生〕 全体
	1月	6月	10月	1月	
国社型	63 13.9	57 12.8	67 14.9	59 14.1	32,084 14.5
国外型	23 5.1	48 10.8	59 13.1	47 11.2	25,252 11.4
社外型	14 3.1	42 9.4	23 5.1	23 5.5	23,335 10.5
国理型	93 20.5	44 9.9	73 16.3	62 14.8	19,328 8.7
国数型	22 4.9	37 8.3	46 10.2	57 13.6	17,587 7.9
社数型	36 8.0	42 9.4	19 4.2	27 6.4	17,526 7.9
社理型	98 21.6	55 12.3	31 6.9	33 7.9	20,082 9.1
外数型	10 2.2	44 9.9	44 9.8	33 7.9	19,477 8.8
外理型	21 4.6	31 7.0	31 6.9	16 3.8	14,519 6.6
理数型	73 16.1	46 10.3	56 12.5	63 15.0	32,155 14.5
計	453 100.0	446 100.0	449 100.0	420 100.0	221,345 100.0

る。しかし3年次以降は次第に落ち込んでいき10月時点では1割を割る。この結果は受験時の特徴とほぼ一致している。これと逆に国外、国数の型は2年次では少ないが、3年次以降は増えて10月時点には1割を上回る。これも受験時の特徴に近い。残りの社外、社数、外数、外理の型はどの試験時点でも1割以下に留まっている。

以上、2年次1月から3年次10月までの各型の出現傾向をみた。この結果、受験時点の特徴が在学中にも安定している型とそうでない型があることがわかった。1割以上の高率で安定するのが国社や理数や国理であり、逆に1割以下の低率で安定するのが社外、社数、外数、外理の型である。また受験時点で1割を占める国外や国数の型は在学中に変動しや

すく、2年次1月時点では低率である。数学や外国語の得点は受験近くになって上昇するようである。

1.2 5教科プロフィールの集団差

1.2.1 男女差について

男子は理系に女子は文系にという事例校の類型選択の違いは、先に指摘したとおりである。こうした類型(コース)選択の偏りを反映して、性別によって5教科プロフィールに差異が生じる可能性があるため、表1.2からこの点を確認しておくことにする。

なおその前に、参考資料に表した全国の現役受験生の5教科プロフィールを男女別にみておく。受験者数の規模では女子は男子の半分にも満たない(男女比は7:3)ので、ほと

表1.2 男女別にみた各試験時点での5教科プロフィール(上段:人数,下段:比率)

	2年次1月		3年次6月		3年次10月		受験時1月		○参考資料 〔昭和63年1月現役受験生〕	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
国社型	39	24	25	32	40	27	31	28	18,649	13,435
	61.9	38.1	43.9	56.1	59.7	40.3	52.5	47.5	58.1	41.9
国外型	11	12	15	33	25	34	20	27	12,028	13,224
	47.8	52.2	31.3	68.8	42.4	57.6	42.6	57.5	47.6	52.4
社外型	10	4	23	19	14	9	15	8	15,379	7,956
	71.4	28.6	54.8	45.2	60.9	39.1	65.2	34.8	65.9	34.1
国理型	39	54	14	30	30	43	21	41	11,425	7,903
	41.9	58.1	31.8	68.2	41.1	58.9	33.9	66.1	59.1	40.9
国数型	12	10	18	19	28	18	29	28	11,658	5,929
	54.6	45.5	48.7	51.4	60.9	39.1	50.9	49.1	66.3	33.7
社数型	31	5	34	8	12	7	20	7	14,494	3,032
	86.1	13.9	81.0	19.1	63.2	36.8	74.1	25.9	82.7	17.3
社理型	37	61	32	23	15	16	22	11	15,833	4,249
	37.8	62.2	58.2	41.8	48.4	51.6	66.7	33.3	78.8	21.2
外数型	8	2	29	15	19	25	19	14	14,942	4,535
	80.0	20.0	65.9	34.1	43.2	56.8	57.6	42.4	76.7	23.3
外理型	6	15	16	15	16	15	11	5	10,484	4,035
	28.6	71.4	51.6	48.4	51.6	48.4	68.8	31.3	72.2	27.8
理数型	47	26	35	11	38	18	47	16	27,673	4,482
	64.4	35.6	76.1	23.9	67.9	32.1	74.6	25.4	86.1	13.9
計	240	213	241	205	237	212	235	185	152,565	68,780
	53.0	47.0	54.0	46.0	52.8	47.2	56.0	44.0	68.9	31.1

んどの型で女子の比率が少なくなるのは当然である。そのなかでも、理数、社数、社理などは男子が8割かそれ以上を占め、さらに男子に偏った比率となっている。これに対して国外の型は男子と女子の比率がほぼ半数となり、女子に偏った比率と考えることができる。国社や国理については男女比が6:4になるが、どちらかといえば国外の型と同じように女子に偏った特徴をもつ⁽¹⁴⁾。

事例校の男女比はやや男子が多くなっている。これを考慮しても、まず受験時1月時点では理数、社数、社理、外理は男子に偏り、国外と国理は逆に女子に偏っている。在学中の各試験時点と比べてみると、受験時の特徴と符合するのは理数、社数そして国外、国理の型である。

このように受験時の型の男女差が在学中でも安定してみられるのは、理数、社数そして国外、国理である。

1.2.2 文理の類型差について

類型選択の結果として、たとえば理系は理科2科目社会1科目、文系は社会2科目理科1科目というように、生徒の学習内容に違いが生じる。この違いが5教科の成績プロフィールにも表れると思われるので、この点を表1.3から調べてみよう。

まず受験時の各型をみると国社、国外、社外、国理、社理は文系に偏っている。逆に理数、外理、外数、国数は理系に偏りがある。

こうした特徴が在学中においてもみられるかを調べると、国社や国理や社理はいずれの試験時点でも文系にはっきりとした比率の偏

表 1.3 類型別にみた各試験時点での5教科プロフィール (上段: 人数, 下段: 比率)

	2年次1月		3年次6月		3年次10月		受験時1月	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系
国社型	41 65.1	22 34.9	47 82.5	10 17.5	49 73.1	18 26.9	45 76.3	14 23.7
国外型	16 69.6	7 30.4	30 62.5	18 37.5	36 61.0	23 39.0	33 70.2	14 29.8
社外型	8 57.1	6 42.9	27 64.3	15 35.7	18 78.3	5 21.7	15 65.2	8 34.8
国理型	70 75.3	23 24.7	37 84.1	7 15.9	58 79.5	15 20.6	48 77.4	14 22.6
国数型	7 31.8	15 68.2	16 43.2	21 56.8	12 26.1	34 73.9	22 38.6	35 61.4
社数型	5 13.9	31 86.1	17 40.5	25 59.5	8 42.1	11 57.9	13 48.2	14 51.9
社理型	75 76.5	23 23.5	39 70.9	16 29.1	23 74.2	8 25.8	21 63.6	12 36.4
外数型	2 20.0	8 80.0	12 27.3	32 72.7	22 50.0	22 50.0	14 42.4	19 57.6
外理型	15 71.4	6 28.6	18 58.1	13 41.9	17 54.8	14 45.2	6 37.5	10 62.5
理数型	20 27.4	53 72.6	10 21.7	36 78.3	13 23.2	43 76.8	10 15.9	53 84.1
計	259 57.2	194 42.8	253 56.7	193 43.3	256 57.0	193 43.0	227 54.0	193 46.0

りがみられるし、理数と国数は理系に明らかに偏りがある。

受験時点での国社、国理、社理そして理数、国数は文理の類型集団差を反映しやすい型として特徴づけることができよう。

1.3 個人における5教科プロフィールの推移傾向

これまでは受験時点の5教科プロフィールについて、在学中の各試験時点においても集団として安定的に出現しやすいプロフィールを探してきた。しかし、この方法ではある試験時点から次の試験時点において、特定の個人の成績プロフィールがどのようなプロフィールに変化する傾向にあるのかを調べることができない。したがって以下では、個人を単位とした5教科プロフィールの追跡の観点からその推移をみてみよう。

表1.4は個人単位の成績プロフィールの推移状況を全体的に要約したものである。

この表を眺める際には、表頭と表側に配列した10タイプの「学力型」の配列に留意されたい。配列は、①国語、②社会、③外国語、④理科、⑤数学の順番を基準にした。この順番はテスト成績における相関の高さを参考にしている。

推移の方向は横方向に眺めればよい。もっとも多く推移した型には網かけをした。また、右下がりの対角線上には同じ型に留まったケースが表れる。

(1) 2年次1月から3年次6月への推移状況

まず同じ型に留まったケースに着目してみると以下の比率となる。このうち、他の型への推移比率より高いのは国社、国外、社外、国理、社数、社理、外理、理数の型である。

表1.4 5教科プロフィールの推移傾向—全体

(1) 2年次1月から3年次6月への変化

		3年次の6月時点										計
		国社	国外	社外	国理	国数	社数	社理	外数	外理	理数	
2年次 の 1月 時 点	国社	23.8	14.3	9.5	11.1	12.7	6.4	11.1	4.8	3.2	3.1	63
	国外	19.1	28.6	9.5	4.8	4.8	4.8	4.8	19.1	4.8	0.0	21
	社外	7.7	7.7	23.1	7.7	15.4	7.7	15.4	7.7	7.7	0.0	13
	国理	10.2	12.5	5.7	17.1	9.1	6.8	15.9	5.7	6.8	10.2	88
	国数	27.3	4.6	9.1	4.6	13.6	9.1	4.6	13.6	0.0	13.6	22
	社数	13.9	0.0	11.1	2.8	8.3	22.2	5.6	19.4	0.0	16.7	36
	社理	15.1	9.7	14.0	8.6	3.2	7.5	24.7	6.5	7.5	3.2	93
	外数	0.0	10.0	10.0	0.0	0.0	20.0	10.0	10.0	40.0	0.0	10
	外理	5.6	27.8	5.6	16.7	0.0	5.6	5.6	0.0	27.8	5.6	18
	理数	2.8	5.6	5.6	8.3	11.1	13.9	0.0	18.1	5.6	29.2	72
計		57	47	41	43	36	42	52	43	30	45	436

(2) 3年次6月から3年次10月への変化

		3年次の10月時点										計
		国社	国外	社外	国理	国数	社数	社理	外数	外理	理数	
3年次の6月時点	国社	30.9	16.4	3.6	20.0	5.5	3.6	7.3	7.3	3.6	1.8	55
	国外	12.8	23.4	4.3	14.9	6.4	0.0	10.6	8.5	19.2	0.0	47
	社外	14.6	14.6	12.2	12.2	2.4	2.4	9.8	19.5	4.9	7.3	41
	国理	12.2	14.6	4.9	39.0	7.3	2.4	2.4	4.9	2.4	9.8	41
	国数	16.7	11.1	5.6	13.9	11.1	8.3	2.8	11.1	5.6	13.9	36
	社数	23.8	2.4	2.4	9.5	16.7	14.3	14.3	4.8	0.0	11.9	42
	社理	21.2	3.9	5.8	23.1	5.8	7.7	15.4	1.9	3.9	11.5	52
	外数	4.7	18.6	2.3	2.3	25.6	0.0	0.0	16.3	14.0	16.3	43
	外理	3.3	10.0	0.0	16.7	13.3	0.0	3.3	23.3	13.3	16.7	30
	理数	4.4	8.7	2.2	10.9	13.0	4.4	2.2	8.7	4.4	41.3	46
計		66	54	19	71	45	19	31	43	30	55	433

(3) 3年次10月から受験の1月への変化

		受験の1月時点										計
		国社	国外	社外	国理	国数	社数	社理	外数	外理	理数	
3年次の10月時点	国社	41.0	6.6	6.6	16.4	11.5	4.9	6.6	1.6	0.0	4.9	61
	国外	11.1	31.5	5.6	3.7	11.1	7.4	5.6	14.8	3.7	5.6	54
	社外	5.6	27.8	16.7	5.6	16.7	0.0	5.6	5.6	11.1	5.6	18
	国理	12.1	3.0	4.6	34.9	15.2	0.0	12.1	1.5	1.5	15.2	66
	国数	4.6	4.6	2.3	9.1	25.0	15.9	2.3	15.9	2.3	18.2	44
	社数	10.5	5.3	5.3	5.3	5.3	21.1	15.8	10.5	0.0	21.1	19
	社理	24.1	17.2	3.5	20.7	6.9	6.9	20.7	0.0	0.0	0.0	29
	外数	4.9	17.1	7.3	9.8	9.8	7.3	7.3	14.6	4.9	17.1	41
	外理	7.1	7.1	10.7	10.7	14.3	10.7	7.1	7.1	14.3	10.7	28
	理数	5.8	1.9	0.0	13.5	17.3	1.9	1.9	7.7	7.7	42.3	52
計		58	46	22	61	57	27	32	32	16	61	412

国社型 23.8% 国外型 28.6% 社外型
23.1% 国理型 17.1% 国数型 13.6%
社数型 22.2% 社理型 24.7% 外数型
10.0% 外理型 27.8% 理数型 29.2%

つぎに、もとの型の教科のいずれか一方(たとえば、国社型では国語か社会のいずれか)を含む型を同系の型と定義し、その他の異系の3つの型と区別してみる。そして同型および同系型の推移比率の合計を求めてみた。

国社型 88.9% 国外型 90.4% 社外型
76.9% 国理型 81.8% 国数型 86.3%
社数型 97.2% 社理型 80.6% 外数型
90.0% 外理型 88.8% 理数型 86.0%

(2) 3年次6月から3年次10月への推移
同じ型に留まった比率は以下の通りである。国社、国外、国理、理数の型はなかでもっとも高い比率となる。

国社型 30.9% 国外型 23.4% 社外型
12.2% 国理型 39.0% 国数型 11.1%
社数型 14.3% 社理型 15.4% 外数型
16.3% 外理型 13.3% 理数型 41.3%

同型および同系型の推移比率の合計は以下のとおりである。

国社型 89.3% 国外型 89.4% 社外型
78.1% 国理型 87.8% 国数型 86.0%
社数型 88.1% 社理型 88.4% 外数型
93.0% 外理型 83.4% 理数型 84.7%

(3) 3年次10月から共通1次受験1月への推移

同じ型に留まった比率は以下の通りである。推移比率のなかでもっとも高いのは国社、国外、国理、国数、社数、外理、理数の型である。

国社型 41.0% 国外型 31.5% 社外型
16.7% 国理型 34.9% 国数型 25.0%
社数型 21.1% 社理型 20.7% 外数型
14.6% 外理型 14.3% 理数型 42.3%

同型および同系型の推移比率の合計は以下

のとおりである。

国社型 93.5% 国外型 81.4% 社外型
72.1% 国理型 93.9% 国数型 93.1%
社数型 89.4% 社理型 75.9% 外数型
78.0% 外理型 67.9% 理数型 92.3%

以上、個人を単位とした成績プロフィールの推移状況を、① 同じ型に留まる比率、② 同型プラス同系型と異系の型との推移比率の比較、の2点から整理してきた。

この結果、どの試験時点間においても国社、国外、国理、理数の型は同じ型に留まる比率がもっとも高いことが明らかとなった。また、これら4つの型は同型プラス同系型の比率の合計がいずれの試験時点間でも8割以上となり、とくに3年次10月から共通1次時点の間では9割以上に達している。

もちろん、各型が同じ型に留まる比率自体はそれほど高くはない。これは成績プロフィールが依拠したデータそのものの変動性と、10タイプの「学力型」指標の安定性の両方が相乗的に関係した結果であろう。

とはいえ、こうした制約を踏まえても、国社、国外、国理、理数の型については以下のような特徴が読み取れる。つまり、これら各型の同型への推移比率を2年次1月時点から順に記してみると、受験時点に近づくにつれてその比率が高くなる傾向がある。

国社型 23.8% → 30.9% → 41.0%
国外型 28.6% → 23.4% → 31.5%
国理型 17.1% → 39.0% → 34.9%
理数型 29.2% → 41.3% → 42.3%

2 文・理志望の変化とその特徴

ここでは、高校生における志望の揺れ動きの問題を実態に即して明らかにし、その実態が男女によって違いがあるのか、あるいは「学

力水準」とどう関わるのかを調べてみる。

2.1 志望の変化のパターン

まず文系および理系の履修者について志望の変化を追ってみる。対象とする398名は4回の校外模擬試験と共通1次をすべて受験した者である。

ここで使った文系・理系の志望データは、2年の7月から3年の11月までに関しては、事例校より提供を受けたデータのなかの第一志望欄の文系・理系の区別をそのまま利用した。3年の1月の共通1次の時点に関しては、実際の受験学部から文・理の志望をわれわれが区別した。その際、家政学部など学部のレベルで文・理の分野を判定できない場合には、さらに学科等のレベルにまでおいて区別した。また、文系・理系の両方の学部を受験した生

徒の志望分野については、類型と同じ分野を志望したと判定した。

分析にあたっては、志望が類型に対応しているか否かによって、志望の変化のパターンを志望一貫者・志望変動者・志望変更者の3集団に分類した。志望一貫者とは、志望が一貫して類型と同じだった者である。志望変動者とは、志望が途中の時点で揺れたものの最終的には類型と一致した者である。志望変更者とは、途中はどうあれ最終的な志望が類型と異なっていた者である。

表2.1では、文系履修者212人、理系履修者186人についての志望の変化をパターンで表した。2年次の7月時点から早くも志望が揺れ始める者がいるし、途中の揺れを挿んで受験時点まで実にさまざまなパターンが現れている。結果的には、文系履修者が16パターン、

表2.1 文理の志望のパターン

(文系履修者)

類型	志望					人数(%)
	2年次		3年次			
	7月	1月	6月	10月	1月	
文	一貫者	文系⇨文系⇨文系⇨文系⇨文系				179(84.4)
	変動者	文系⇨文系⇨文系⇨理系⇨文系				5(2.4)
		文系⇨文系⇨理系⇨文系⇨文系				2(0.9)
		文系⇨文系⇨理系⇨理系⇨文系				3(1.4)
系	変更者	文系⇨文系⇨文系⇨文系⇨理系				8(3.8)
		文系⇨文系⇨文系⇨理系⇨理系				1(0.5)
		文系⇨理系⇨文系⇨文系⇨理系				1(0.5)
		文系⇨理系⇨理系⇨文系⇨理系				1(0.5)
		理系⇨文系⇨理系⇨理系⇨理系				2(0.9)
		理系⇨理系⇨文系⇨理系⇨理系				2(0.9)
		理系⇨理系⇨理系⇨理系⇨理系				1(0.5)
	その他	文系⇨文系⇨文系⇨理系⇨分類できず				1(0.5)
		理系⇨理系⇨文系⇨文系⇨分類できず				1(0.5)
		文系⇨文系⇨文系⇨文系⇨志望せず				2(0.9)
文系⇨文系⇨理系⇨理系⇨志望せず				1(0.5)		
計						212(100.0)

(理系履修者)

	志望					人数(%)
	2年次		3年次			
	7月	1月	6月	10月	1月	
理系	一貫者	理系⇨理系⇨理系⇨理系⇨理系				116(62.4)
	変動者	理系⇨理系⇨理系⇨文系⇨理系				5(2.7)
		理系⇨文系⇨理系⇨理系⇨理系				2(1.1)
		理系⇨文系⇨文系⇨文系⇨理系				1(0.5)
		理系⇨文系⇨文系⇨文系⇨理系				2(1.1)
		文系⇨理系⇨理系⇨理系⇨理系				3(1.6)
		文系⇨理系⇨理系⇨文系⇨理系				1(0.5)
		文系⇨文系⇨理系⇨理系⇨理系				3(1.6)
	変更者	理系⇨理系⇨理系⇨理系⇨文系				11(5.9)
		理系⇨理系⇨理系⇨文系⇨文系				4(2.2)
		理系⇨理系⇨文系⇨文系⇨文系				7(3.8)
		理系⇨文系⇨理系⇨文系⇨文系				2(1.1)
		理系⇨文系⇨文系⇨文系⇨文系				10(5.4)
	その他	文系⇨理系⇨文系⇨文系⇨文系				1(0.5)
		文系⇨文系⇨理系⇨文系⇨文系				1(0.5)
		文系⇨文系⇨文系⇨文系⇨文系				5(2.7)
理系⇨理系⇨理系⇨文系⇨分類できず				1(0.5)		
その他	理系⇨文系⇨文系⇨文系⇨分類できず				1(0.5)	
	文系⇨文系⇨文系⇨文系⇨分類できず				1(0.5)	
	理系⇨理系⇨理系⇨理系⇨志望せず				4(2.2)	
計						186(100.0)

表 2.2 類型別の志望の変化

類型	一貫	変動	変更	計
文	179(86.5)	12(5.8)	16(7.7)	207(100.0)
理	116(64.8)	22(12.4)	41(23.2)	177(100.0)

表 2.3 男女別の志望の変化

類型	性別	一貫	変動	変更	計
文	男子	68(91.9)	3(4.1)	3(4.1)	74(100.0)
	女子	111(83.5)	9(6.8)	13(9.8)	133(100.0)
理	男子	102(70.8)	8(5.6)	35(24.3)	144(100.0)
	女子	14(41.2)	14(41.2)	6(14.6)	34(100.0)

理系履修者が22パターンとなり、人数は一学級分少ないにもかかわらず理系のほうが志望の揺れは多様である。

これら各パターンを志望一貫者・志望変動者・志望変更者別に表したのが表 2.2 である。文系履修者の一貫者は 86.5%，理系履修者では 62.4% となり、文系履修者のほうが安定していることがわかる。裏返せば、理系履修者には変動者・変更者が多く出現することになる。理系履修者の志望の揺れは一般によく指摘される現象であるが、事例校においては変更者だけを見ても 41 人 (22.0%) となり、ほぼ 5 人に 1 人の割合となっている。

ところで、類型選択のし方では、男子が理系、女子が文系に多かった。志望の揺れについても同じような男女別の傾向の違いがみられるのか、表 2.3 によって調べてみた。

文系履修者においては、男子は一貫者 91.9%，変動者 4.1%，変更者 4.1% であったのに対し、女子は一貫者 80.4%，変動者 6.5%，変更者 9.4% である。女子のほうがやや変更者が多い。ちなみに、この変更者の志望先をみると、看護学科系統または食物学科な

ど理系分野の家政学部系統に集中していた。

理系履修者においては、男子は一貫者 68.5%，変動者 5.4%，変更者 23.5% であったのに対し、女子は一貫者 37.8%，変動者 37.8%，変更者 16.2% となり、女子のほうに変動者がわりと多くなる。もちろん、理系の女子はその総数が 37 名とかなり少ないので比率は変動しやすい。しかし、小規模集団であれ変動者 14 名変更者 6 名の数値は、進路指導の上では決して小さな意味にはならないだろう。

以上のように志望の揺れに関して男女別の違いが存在し、文系では変更者に、理系では変動者に女子の比率が高くなる。

2.2 志望の変化と「学力水準」

つぎに、志望の揺れが「学力水準」の高さとどう関係しているか否かを調べるために、一貫者・変動者・変更者の 3 集団を比較してみよう。

ここで述べた「学力水準」は、文系・理系を込みにして全集団を上位層、中位層、下位層にほぼ 3 等分して表した。なお「水準」の

データは校外模擬試験成績の偏差値および共通1次成績のパーセンタイル順位を利用した。すなわち、2年の7月は3教科の偏差値の平均値、2年1月、3年6月、3年10月は5教科の偏差値の平均値、3年1月は5教科のパーセンタイル順位の平均値である。

表2.4は、各試験時期における志望の揺れと「学力水準」との関係性を文・理に分けて示したものである。

まず「学力水準」だけを見ると、いずれの試験時点でも文系と理系の間に差がみられ、文系は中位・下位層に厚く、理系は上位・中

位層のほうに厚い分布をしている。

つぎに、一貫者・変動者・変更者を比較すると、文系履修者においてはどの試験時点においても変動者・変更者ともに下位層が厚く、一貫者と違いがある。

一方、理系履修者においては、変動者と一貫者の間では違いはないが、変更者との間に幾分違いがある。つまり、変更者の「学力水準」は上位層が薄く、下位層が厚くなる傾向にある。

このように、文理ともに変更者の「学力水準」は相対的に低いことがわかる。

表2.4 志望の変化と「学力水準」

① 志望の変化と2年次7月の「学力水準」

類型	変化	上位	中位	下位	計
文	一貫	41(22.9)	62(34.6)	76(42.5)	179(100.0)
	変動	1(8.3)	4(33.3)	7(58.3)	12(100.0)
	変更	2(12.5)	5(31.3)	9(56.3)	16(100.0)
理	一貫	61(52.6)	36(31.0)	19(16.4)	116(100.0)
	変動	12(54.6)	6(27.3)	4(18.2)	22(100.0)
	変更	11(26.8)	15(36.6)	15(36.6)	41(100.0)

② 志望の変化と2年次1月の「学力水準」

類型	変化	上位	中位	下位	計
文	一貫	44(24.6)	65(36.3)	70(39.1)	179(100.0)
	変動	3(25.0)	2(16.7)	7(58.3)	12(100.0)
	変更	2(12.5)	7(43.8)	7(43.8)	16(100.0)
理	一貫	57(49.1)	30(25.9)	29(25.0)	116(100.0)
	変動	11(50.0)	6(27.3)	5(22.7)	22(100.0)
	変更	12(29.3)	19(46.3)	10(24.4)	41(100.0)

③ 志望の変化と3年次6月の「学力水準」

類型	変化	上位	中位	下位	計
文	一貫	41(22.9)	68(38.0)	70(39.1)	179(100.0)
	変動	2(16.7)	4(33.3)	6(50.0)	12(100.0)
	変更	3(18.8)	4(25.0)	9(56.3)	16(100.0)
理	一貫	63(54.3)	29(25.0)	24(20.7)	116(100.0)
	変動	10(45.5)	8(36.4)	4(18.2)	22(100.0)
	変更	11(26.8)	14(34.2)	16(39.0)	41(100.0)

④ 志望の変化と3年次10月の「学力水準」

類型	変化	上位	中位	下位	計
文	一貫	42(23.5)	72(40.2)	65(36.3)	179(100.0)
	変動	1(8.3)	3(25.0)	8(66.7)	12(100.0)
	変更	3(18.8)	5(31.3)	8(50.0)	16(100.0)
理	一貫	61(52.6)	29(25.0)	26(22.4)	116(100.0)
	変動	12(54.6)	4(18.2)	6(27.3)	22(100.0)
	変更	13(31.7)	12(29.3)	16(39.0)	41(100.0)

⑤ 志望の変化と3年次1月の「学力水準」

類型	変化	上位	中位	下位	計
文	一貫	44(24.6)	67(37.4)	68(38.0)	179(100.0)
	変動	1(8.3)	6(50.0)	5(41.7)	12(100.0)
	変更	4(25.0)	5(31.3)	7(43.8)	16(100.0)
理	一貫	60(51.7)	29(25.0)	27(23.3)	116(100.0)
	変動	13(59.1)	3(13.6)	6(27.3)	22(100.0)
	変更	11(26.8)	16(39.0)	14(34.2)	41(100.0)

3 志望変更者等の5教科プロフィール

前節では、性別と成績水準との関連で、志望の変動者や変更者の特徴が明らかになった。本節ではこうした志望変更者等の特徴をさらに5教科プロフィールの観点から捉えてみることにする。

表3.1および表3.2はそれぞれ文系集団と理系集団について表したものであり、各試験時点の10タイプの「学力型」を変更者・変動者・一貫者の別に分けて比較したものである。

表3.1の文系集団についてみると、いずれの試験時点においても国理型には変更者・変動者の比率の偏りがやや強くなるように思われるが、変更者や変動者の数はもともと少数なのではっきりとした特徴としては指摘しにくい。

表3.2の理系集団については、いずれの試験時点においても国社型には変更者・変動者の比率にはっきりとした偏りがある。また傾向としては弱いですが、国外と社外にも同じような偏りをみることができる。理系集団においてはいわゆる「隠れ文系」なる現象が指摘されてきたが、国社あるいは国外や社外における比率の偏りはこうした現象の表れとみることができよう。

まとめと考察

事例校の受験時の5教科プロフィールとしては、全国的にも高い比率となる理数、国社、国外の型に加えて、国理や国数の型も同じく高い比率となった。この高校の受験時の特徴を在学時の試験成績プロフィールと対応させた結果、国社や理数や国理は在学時でも安定して高い比率を示した。受験時点で高い比率を示した国外や国数の型は在学中には一貫して高くはないが、受験時に近づくと次第に高

くなるという傾向が読み取れた。

また男子は理系、女子は文系といった類型選択の傾向に着目して、この成績プロフィールの男女差を調べた。その結果、受験時の特徴として理数、社数の型には男子が多く、国外と国理の型には女子が多かったが、この特徴は在学中のプロフィールのなかでも安定してみられた。

成績プロフィールの集団差については、学習内容の差異を意味する類型差が教育的な意味においては重要である。このため、文理の類型差がどのような成績プロフィールのなかにより安定的にみられるかを調べた結果、受験時点でも在学中でも一貫した特徴として、国社、国理、社理の型は文系集団に偏り、理数と国数の型が理系集団に偏る傾向にあった。

受験時点と在学中の成績プロフィールの等質性を仮定して、以上のような集団的特徴を抽出してきたが、さらに個人レベルの成績プロフィールの推移状況についても分析を行った。その結果、10タイプのプロフィールのなかで国社、国外、国理、理数の4つの型が同じ型に留まる傾向性が強いことが明らかとなった。とくに3年10月と受験時のプロフィールの推移において、比較的高い比率(国社型→41.0%、国外型→31.5%、国理型→34.9%、理数型→42.3%)となったのは、この時期に生徒個人の5教科の成績プロフィールが安定する可能性を示唆していると考え

る。以上のような5教科プロフィールの分析を踏まえて、他方で生徒の文系理系の志望の揺れ動きについて実態を調べて、そのような実態に成績プロフィールの情報がどう関わるのかを探ってみた。

志望の揺れ動きの実態については、①志望が途中の時点で揺れたものの最終的には類

表 3.1 進路変更者の5教科プロフィール—文系履修者

	2年次1月			3年次6月			3年次10月			3年次1月		
	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者
国社型	3	2	32	3	3	39	2	3	40	2	2	38
	8.1	5.4	86.5	6.7	6.7	86.7	4.4	6.7	88.9	4.8	4.8	90.5
国外型	0	0	13	3	3	19	2	1	27	2	2	24
	0.0	0.0	100.0	12.0	12.0	76.0	6.7	3.3	90.0	7.1	7.1	85.7
社外型	0	0	7	1	1	23	2	2	11	0	0	12
	0.0	0.0	100.0	4.0	4.0	92.0	13.3	13.3	73.3	0.0	0.0	100.0
国理型	9	6	41	3	5	21	4	5	40	5	6	34
	16.1	10.7	73.2	10.3	17.2	72.4	8.2	10.2	81.6	11.1	13.3	75.6
国数型	1	2	4	0	1	14	0	1	11	2	1	16
	14.3	28.6	57.1	0.0	6.7	93.3	0.0	8.3	91.7	10.5	5.3	84.2
社数型	0	0	3	1	1	15	1	1	5	0	1	12
	0.0	0.0	100.0	5.9	5.9	88.2	14.3	14.3	71.4	0.0	7.7	92.3
社理型	5	7	61	5	3	26	3	1	19	4	0	17
	6.8	9.6	83.6	14.7	8.8	76.5	13.0	4.3	82.6	19.0	0.0	81.0
外数型	0	0	1	0	1	10	3	2	15	2	0	11
	0.0	0.0	100.0	0.0	9.1	90.9	15.0	10.0	75.0	15.4	0.0	84.6
外理型	1	0	12	1	0	16	1	1	15	0	0	6
	7.7	0.0	92.3	5.9	0.0	94.1	5.9	5.9	88.2	0.0	0.0	100.0
理数型	1	1	18	1	0	6	2	1	8	1	0	9
	5.0	5.0	90.0	14.3	0.0	85.7	18.2	9.1	72.7	10.0	0.0	90.0
計	20	18	192	18	18	189	20	18	191	18	12	179

表 3.2 進路変更者の5教科プロフィール—理系履修者

	2年次1月			3年次6月			3年次10月			3年次1月		
	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者	変更者	変動者	一貫者
国社型	8	1	10	2	3	4	8	4	3	5	3	4
	42.1	5.3	52.6	22.2	33.3	44.4	53.3	26.7	20.0	41.7	25.0	33.3
国外型	4	0	1	5	3	10	6	1	14	6	2	4
	80.0	0.0	20.0	27.8	16.7	55.6	28.6	4.8	66.7	50.0	16.7	33.3
社外型	2	0	3	5	3	7	3	0	1	4	0	4
	40.0	0.0	60.0	33.3	20.0	46.7	75.0	0.0	25.0	50.0	0.0	50.0
国理型	2	5	15	2	1	4	2	1	12	1	2	10
	9.1	22.7	68.2	28.6	14.3	57.1	13.3	6.7	80.0	7.7	15.4	76.9
国数型	3	4	8	4	2	13	9	6	17	4	8	22
	20.0	26.7	53.3	21.1	10.5	68.4	28.1	18.8	53.1	11.8	23.5	64.7
社数型	6	2	23	8	2	14	0	0	11	4	0	10
	19.4	6.5	74.2	33.3	8.3	58.3	0.0	0.0	100.0	28.6	0.0	71.4
社理型	7	2	11	4	0	9	2	1	5	2	0	8
	35.0	10.0	55.0	30.8	0.0	69.2	25.0	12.5	62.5	20.0	0.0	80.0
外数型	0	0	8	5	5	21	3	3	15	5	4	9
	0.0	0.0	100.0	16.1	16.1	67.7	14.3	14.3	71.4	27.8	22.2	50.0
外理型	2	1	2	3	2	6	3	2	9	2	0	8
	40.0	20.0	40.0	27.3	18.2	54.5	21.4	14.3	64.3	20.0	0.0	80.0
理数型	8	7	36	5	1	30	6	4	31	9	3	37
	15.7	13.7	70.6	13.9	2.8	83.3	14.6	9.8	75.6	18.4	6.1	75.5
計	42	22	117	43	22	118	42	22	118	42	22	116

型と一致した者(志望変動者)と、②途中はどうあれ最終的な志望が類型と異なっていた者(志望変更者)と、に区別してそれぞれの特徴を調べた。

結果としては、志望変動者および変更者ともに理系履修者のほうが多く、両者合わせると3割を超えた。うち変更者が2割を超えた。男女別の違いもある程度存在し、理系変動者および文系変更者には女子が多く出現しやすい。また「学力水準」を眺めてみると、文理ともに変更者は相対的に低いことがわかった。

最後に、変更者や変動者について成績プロフィールの特徴を調べてみた。文系集団については国理の型に表れるように思われるが、変更者や変動者の数はもともと少数なのではっきりとした特徴としては指摘しにくい。理系集団については、いわゆる「隠れ文系」なる現象が指摘されてきているのと符号するかと思われるが、国社あるいは国外や社外の型に変更者・変動者が表れやすかった。

本論文の試みは、5教科プロフィールの定量化に伴う問題点、10タイプの「学力型」指標の問題点、依拠した在学中の成績データの問題点など多くの課題や制約のもとで進めてきた。したがって、ここでの分析結果が5教科の成績プロフィールの一般的特徴を表すものではない。しかしながら、5教科の成績プロフィールについてこれまでわれわれが積み上げてきた仮定や疑問に、ある程度見通しを与えるような知見が得られたと考える。

以下でその知見を紹介し、それに対する課題を述べることで本論文の結びとする。

受験時点の5教科プロフィールのなかには、在学中の情報と対応させた場合に、比較的安定的な特徴をもつプロフィールと、変動しやすいプロフィールがあることが明らかとなった。成績上位2教科を基準にした10タイ

プの「学力型」によってそれをみると、国語・社会、国語・外国語、国語・理科、数学・理科といった型が挙げられる。しかも国語・社会、国語・外国語、国語・理科の型は文系コースに学ぶ集団に多くなり、数学・理科の型は理系コースに学ぶ集団に多い。そして文理のコース選択の傾向として男女差が存在するためか、国語・外国語や国語・理科の型には女子が多くなり、逆に数学・理科には男子が多くなる。なお、こうした特徴を裏打ちする事実として、国語・理科の型の理科の科目は生物の占める比率が大きいことを挙げておかねばならない。

もともと5教科の成績プロフィールを要約するものとして10タイプの「学力型」を導入したときは、個々の「学力型」を等価なものとして構成してきた。それぞれの成績プロフィールの独自の価値を主張し、個人の学力水準(あるいは達成水準)はそれぞれのプロフィールのなかで問われるべきという意識がその背景にあったからである。とはいえ他方では、10タイプのプロフィール要約は仮の指標であり、もっと指標として安定し教育的意味のある指標を模索していたのであった。

一高校の事例に限定されるとしても、本研究の分析から明らかとなった受験時点の成績プロフィールの特徴に基づけば、一面ではあれ国語・社会、国語・外国語、国語・理科、数学・理科といったいわば基幹的なプロフィールの存在を認めていく必要がある。そして、これらを手掛かりにしてさらに5教科プロフィールの複雑な諸相を解明する必要がある。選抜時点における5教科プロフィールが入学者選抜の研究や入学後の追跡研究に役立つようにするには、教科の実力をより反映した在学中の成績プロフィールの様相、そうした成績プロフィールの変容の様相、あるいは個人の意識として定着した5教科の自己プロ

フィールドの役割や効果, といった課題を高校や大学の教育的文脈のなかで追求していくことが大事と考える。

(14) この知見もすでに岩坪秀一・池田輝政・岩田弘三(1988)の119頁で指摘済みである。

(謝辞)

本研究が成就するまでには、沢山の方々のお世話になった。まずわれわれの研究目的に理解を寄せられ、貴重なデータを提供して下さった事例校の校長先生並びに進路指導の先生方に厚くお礼を申し上げたい。そして、今回の事例校を含め調査の実行計画に多大の貢献をしていただいた大学入試センターの中村宏治進学指導専門官にもお礼を述べたい。

また本論文を分析する過程でさまざまな人にお世話になった。なかでも、大学入試センターの高野文彦副所長および清水留三郎研究開発部長には分析方法の面で貴重な示唆を、山田文康助教授には分析結果に関する有益な助言をいただいた。最後に、高取真理さん、坂田洋子さん、渡辺由布子さん、小堀久仁子さん、村松久子さん、清水靖子さん、手島穂寿美さん、にはデータ入力や資料作成でお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。

補遺 10タイプの「学力型」の統計的特徴について

事例校に関する10タイプの「学力型」の統計的な特徴を、参考資料として整理した。以下では、その結果について表を提示し、簡単な説明を加えておく。

表A.1は2年次1月から3年次1月までの各試験時点を並べて、それぞれ上位1番目の教科の平均値(①)、上位2番目の教科の平均値(②)、そして上位2番目と3番目の差の平均値(②-③)を示したものである。

同一試験時点内で見ると、どの試験時点でも各学力型の間にならばつきがあることがわかる。たとえば3年次10月までを比較してみると、上位1番目(①)の10学力型の平均値のレンジは約5点である。このレンジの幅は上位2番目(②)についても同じである。

(注)

- (1) 岩坪秀一・池田輝政・岩田弘三「大学が重視する入試教科と受験生の学力特性—共通第1次学力試験の5教科得点を基礎として」大学入試センター研究紀要 No. 17, 1988, 101-144頁
- (2) 山田文康「共通第1次学力試験の5教科得点に基づく学力型の分析」大学入試センター研究紀要 No. 19, 1990, 1-45頁
- (3) 鈴木規夫「国公立大学入学者選抜試験の効果に関する実証的研究」大学入試センター研究紀要 No. 19, 1990, 47-88頁
- (4) 山田文康(1990), 2頁
- (5) 岩坪秀一・池田輝政・岩田弘三(1988), 121-123頁
- (6) 同上書, 120-121頁
- (7) 同上書, 128-140頁
- (8) 山田文康・山村 滋「受験者と合格者の学力特性に関する学力型に基づく分析」大学入試フォーラム No. 12, 1991, 34-45頁
- (9) 文部省高等学校課「昭和63年度公立高等学校の教育課程編成状況および学習習熟度別学級編成の実施状況調査」平成2年4月
- (10) 事例校の進路指導の実態に関する調査報告資料(1990年)
- (11) 大学入試センター「高等学校の進学指導における個性尊重に関する調査研究報告書—偏差値を主とした進学指導の改善を中心として—」平成3年2月の第4章「生徒の志望分析と教科科目の学力との関係についての分析」141-151頁に、本研究の中間報告の結果をまとめている。
- (12) 社会科と理科の科目間得点調整は、大学入試センター研究開発部の山田文康助教授に依頼した。得点調整の方法については、山田(1990)の25頁を参照されたい。
- (13) この知見は、岩坪秀一・池田輝政・岩田弘三(1988)の研究(127頁の注1)のなかで、指摘されているし、最近では鈴木(1990)の研究(49頁)でも確認されている。

表 A.1 事例校生徒の10タイプの「学力型」に関する試験時点別統計値
(上段: 平均値 下段: 人数)

	2年次1月			3年次6月			3年次10月			3年次1月		
	①	②	②-③	①	②	②-③	①	②	②-③	①	②	②-③
国社	59.9	55.1	4.0	59.2	52.8	3.4	57.8	52.7	4.2	65.1	48.8	11.4
	64			56			67			57		
国外	62.4	58.4	4.3	60.8	55.8	3.7	61.0	56.0	4.7	67.5	54.2	9.6
	23			48			57			47		
社外	65.2	59.7	3.5	55.7	52.2	3.7	56.8	51.7	2.7	66.2	48.1	7.9
	14			41			22			22		
国理	61.1	55.7	4.3	55.7	50.9	2.9	59.8	53.5	3.8	66.8	51.5	14.7
	91			43			72			62		
国数	62.2	55.8	2.7	60.5	55.3	3.7	58.3	53.5	4.0	66.4	52.2	11.5
	22			35			46			57		
社数	61.8	58.0	3.2	58.6	53.8	3.5	56.7	52.1	2.2	69.6	57.3	5.4
	36			42			19			27		
理社	61.6	56.4	4.5	56.8	51.2	2.9	60.8	54.5	4.0	68.8	54.5	9.6
	94			53			31			31		
数外	64.3	60.0	1.4	61.6	57.2	3.0	56.3	53.0	3.0	62.9	51.1	8.5
	10			44			44			33		
外理	63.0	56.8	3.1	54.5	51.4	2.0	60.5	56.2	2.3	64.7	58.3	8.2
	21			31			30			16		
数理	65.2	58.8	4.4	59.6	55.0	4.2	58.0	53.2	3.9	67.0	53.1	10.0
	72			46			55			59		

(注) ①は上位1番目の教科の平均値
 ②は上位2番目の教科の平均値
 ②-③は上位2番目と上位3番目の教科の得点差の平均値
 データは2年次1月から3年次10月までは偏差値, 3年次1月はパーセント値

また上位2番目と3番目の差の平均値(②-③)のレンジは2,3点の幅がある。特定の学力型の平均値を経時的に追ってみると、たとえば国社型はだいたいにおいて低いほうに位

置するし、逆に国外型は高いほうになる。このように学力型の水準には安定的な差が生じていることが理解できる。

